

第十一章  
サクラとニワトリ

山本が日本国学会議の人事の話に戻す。

要するに政府は自分たちに都合のいいことを言う学者をメンバーにしたい。逆にメンバーになつて知名度を上げたい学者は政府に心地よいことを言うだろう。

学者に限ったことではない。いわゆる「あつてはならない不祥事や事件」を起こした官公庁や上場企業がよく「第三者委員会」という集団を立ち上げるが、そのとき採用されるのは政府や企業寄りの学者あるいは専門家たちだ。「有知識者委員会」とか「外部委員会」などともつともらしい名前がつけられるが、どのような基準で委員会のメンバーを決めたのか、その報酬はどうなっているのかは謎だらけ。

今回、第四波の新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言発出にノミネートされた都道府県やその期間について少なすぎる、あるいは短すぎるという新型コロナウイルス感染対策の専門家で構成される諮問委員会から苦言が出された。さらに「物言う株主」に刺激されたのか「物言う諮問委員会」と変異して忌憚のない意見を国会で座長が述べた。するとあれだけ学会議の人事に文句を言った総理はいとも簡単に諮問委員会の意見に従つた。

「専門家が言っているのだから、それに従う」

学術界の人事では専門家が推薦しても拒否したのに様変わりだ。世間では総理大臣や厚生大臣や経済再生担当大臣の説明……説明にはほど遠い「緊張感」「危機感」「総合的に」「調整中」「しつかりと」などという言葉の遊びをする大臣たちより、諮問会座長の言葉を信頼している

から、その意見に従わざるを得なかったのだろう。

少し前までは緊急事態宣言を発出するかどうかの瀬戸際になっても、なかなか専門家委員会は開かれなかった。その「会」の名称も「分科会」とか「諮問会」とか名称がコロコロ変わる。一体どのような過程を経て物事が決まるのか、会議の内容や議事録の公表は一切なかった。

データの分析に時間がかかるし、専門家内の議論や意見調整も必要だが、コロナウイルス軍の攻撃に対して余りにもものきな対応と言わざるを得ない。戦争中に司令部や情報機関がのんびりと会食したり作戦を先送りしたりすれば、前線の兵士は右往左往するしかない。兵站は途絶え武器も満足に与えられないなかでどのようにして戦うのか、命令も指示もない。

一方で竹槍しか与えられていない国民には我慢を強いるだけで具体的戦い方を示さない。「頑張れ」という精神論だけに終始する。「勝つまでは酒を飲むな」と言いつつ政府関係者が頻繁に会食するのではどうしようもない。

いずれにしても危機に対して初動を誤るとその後の対応はすべて後手に回る。常に最悪のことを考えて備えておくといういわゆる平時の備えを怠った強大なツケが回ってきた。財政が逼迫し続けているのに、はじめの一手を誤って多額の出費を余儀なくされたのに政府はまったく無頓着だ。所詮は自分たちのお金ではなく国民の税金だから。

むしろ新型コロナウイルスに対して国民は素晴らしい対応をした。給付金を低所得者に限定して三十万円にすべきか、全員十万円にすべきかと決断が長引く政府を横目によく頑張った。

しかし、国民の善意を政府は生かすことができなかつた。

これまでにない思い切った方法で迅速な補償をしながら感染を止めることに全力で取り組んで安心感を国民に与えれば、どうしても緩みがちになる心境を引き締めることができたはず。言い換えれば予断を抑えることができたはず。そして何よりも政府に対する不信感を払拭することができた。つまり政府はチャンス逃すどころか放棄してしまった。

国民が政府を信頼していないことに、政府は気がつかないのかあるいは無視しているのかは別にして、口には出さないがそんな国民を信頼しないという、どうしようもない相互不信感の泥沼にはまり込んだ。こんなときこそ強力なリーダーシップが必要になるが、言葉の遊びに終始して具体策の策定、発表、説明、説得を全く行わない首相並びに閣僚。まるで支持率が落ちるのを待っているような情けない状況が国民に閉塞感を与える。

うまくやれば財政はなんとか健全性を維持でき、補償と今後の売上とを天秤にかけ新事業を起業する者が現れゾンビ事業者が淘汰されて新しい時代が切り開けたかも知れない。

それに下手すると奇妙な政治家、つまり独裁者が生まれる可能性もあるから用心しなければならぬ。

\*\*\*

「ピンチはチャンスか」

田中がつぶやく。

「僕には無理。だってピンチかチャンスか判断できないもの。今の僕のポジション、ピンチ？ チャンス？ 全然分からない」

「とにかく今は間違はなく人類にとってピンチ、人類以外の動物……いやウイルスにとってはチャンスのポジションじゃ」

「進化がサルで止まれば良かったんだ」

「なるほど。ところでコロナウイルスでかき回されておるが、桜と鶏はどうなったんじゃ」

「サクラとニワトリ？ サクラとウグイスなら分かるけど」

「ウグイスなら梅じゃ。花札ではそうなっておる」

「梅ならメジロだわ」

テレビの電源が入っていないのに山本の声がする。

大家が不機嫌そうに暗いテレビ画面に向かって声を出す。

「わかつとらんのう。『総理と桜を見ながら飲む会』と『卵を食べる会』の事件じゃ」

待っていましたとばかりにテレビに電源が入ると桜のかんざしを挿した山本が忙しそうに目玉焼きを作っている。

「どこからでもかかってくる！」

そんな山本に田中の目元が緩む。

「サクラ！ きれいだなあ。似合っている」

「お世辞でもうれしいわ。じゃあ、サクラ、サクラ……♪」

画面には総理主催の「桜を見ながら飲む会」の集合写真が大写しされる。総理夫妻以外の顔は白いモヤでぼやけている。田中が苦言を上げる。

「今になって個人情報だから総理夫妻以外にボカシをかけるなんておかしい！」

「そのとおり。これって放映されたし総理と一緒に写っている写真を自慢して見せ回っている人も一杯いたわ。中には詐欺まがいの商談を持ちかけて逮捕された人もいた」

山本の怒りの解説が続く。

この桜会は二日にわたる。招待者は抽選でも何でもなく、総理が選定して招待していた。つまり招待されたのは総理のファンだ。

一日目は都内の有名高級ホテルでの食べ放題飲み放題パーティー。残った食べ物は廃棄処分されるという「もったいない」の典型でもある立食会。会費はひとり五千円。立食会と言っても超一流のホテルとなれば五千円で収まるはずがない。足らずを総理の個人事務所が負担していたのが発覚した。

それでも総理は国会で何度も次のような答弁を繰り返した。

「私の事務所の責任者に尋ねたところ一切負担していないとのことでありませぬ。すべて『サクラを見る会』に参加した方々が負担しているので当然収支報告書には載せておりませぬ」

ホテル側が事務所宛ての領収書を発行したと発表してもし、ら、を切った。

「領収書など受け取っていません」

翌日はサクラをじっくり見る会だ。しっかりと国からお金が出ている。しかも花見会場は部外者立ち入り禁止。

叙勲に該当しなくてもそれなりに社会貢献した人や障害者の人たちを招待するのなら「さすが首相！ いいところある」と賞賛の声が桜の花の蜜を吸うメジロのように飛び交うだろう。

「そんなひどい会をしていたんですか」

田中が憤慨する。

「まあ、首相個人のファンクラブのようなものじゃ。しかも公費を使った接待じゃ」

田中が紙にすらすらと何やら書く。

「税金を使って集う開花かな」

「川柳？ うまい！ 『会か』というところを桜にかこつけて『開花』とヒネったのじゃな」

大家のべた褒めの言葉に田中が恐縮するが山本は冷ややかに二人を見つめる。

「単なるだじゃれじゃないの」

山本の文句に大家が話題を変える。

「それより鶏と卵の話じゃ。もつとも『鶏が先か卵が先か』という話ではないのじゃ」

「当たり前でしょ！」

山本が焦げた目玉焼きを田中と大家に突きつける。

「日本では鶏を三密にして卵を産ませます」

サクラのかんざしを抜くと山本が解説を始める。

過密なケージの中で鶏が餌をついばみせつせと卵を産む養鶏場の映像が流れる。国際的には止まり木なども備えたある一定の広さの施設で鶏を飼うようにというルールがある。しかし、それではコストがかかり儲からないので、鶏卵業者はそのルールを取り入れないように政府に嘆願する。消費者も安い卵になれているのでどちらかというと鶏卵業者の意見に賛同する。しかし、自然に近い環境で育った鶏の卵の方が明らかに栄養価や味の面で優れている。

鶏舎から大臣室へと画面が切り替わる。

「大臣。くれぐれも国際ルールの導入を阻止してください」

一国民がおいそれと大臣に面会することはできない。しかし、業界団体の代表者ともなると紙袋持参で農林水産大臣室に入ることができる。紙袋の中には分厚い紙の束が入っている。

「安物のトイレトペーパーですが……」

「いやあ、わしはウオッシュレットを使っている」

「故障したら大変でしょ。そのときのために」

「気が利くな」

例のテレビで大臣と業界代表のやりとりを見ていた田中が怒りで腕をブルブルと震わせる。



「下手なドラマよりいいでしょ？」

「ここまで迫真の演技ができる役者はいないのう」

「これが『卵が先か鶏が先か問題』です」

「原因は鶏で結果が卵か」

「そうです。ついこの間も鳥インフルエンザで何百万羽という鶏が殺傷処分されました」

山本が頷くと軽く目を閉じてから今度は首を小さく横に振る。

「この程度の収賄事件は大したことではありません」

「えー？ こんなこと絶対に許せないのに」

「確かにそうですが鶏を過密に育てていること自体が問題です。これは豚にも言えることです  
が……」

「ブタ？ 確かにブタも狭い部屋で飼育されておるな」

大家の言葉に田中が挙手する。

「分かった！ 人間だけじゃない。動物だって三密に弱い」

「鳥インフルエンザ、そして豚熱じゃな」

山本が割って入る。

「そうです。動物だけではありません。植物だってそうです」

「植物も？」

「毎年同じ耕地に同じ種類の作物を栽培しない方がいいということはお存じですね」

田中が頷きながら応じる。

「連作すると作物が病気にかかりやすくなる」

頷きながら山本が画面から消えるとバナナの木が現れる。

「挿し木で増やすコーヒーや株分けで増やすバナナは一本の木が病気になると全滅します。みんな遺伝子が同じだから育てやすいけれど全滅もしやすい。動物でも植物でも多様性が大事な  
の」

「人間の都合に合わせて家畜や農作物を育てようとするとしつぺ返しを受けると言うことか」

「そのようね」

頷く山本に大家が発言する。

「消費者も安いモノを求めるし生産者も大量飼育や栽培を改めようとはせんのか」

「形の悪い野菜なんか棄てられるしなあ」

「もったいないことじゃ。わしが子供の頃は曲がったキュウリがわんさと売られていた。むしろまっすぐなキュウリは少なかつたぞ」

「えーっと、何の話をしていたんだっけ」

「鶏が先か卵が……」

「安い卵よりそれなりの卵を求めるようにした方がいいのじゃないかな。病気になった鶏を何

百万羽も処分するぐらいなら、病気にならないように育てた方がいいと思う」

「当然そうすべきでしょうが、政府は経済的にどちらが優れているかを数字で示すことなく供給側の意見を尊重して消費者の低価格志向をかぶせて政策を決定します。でも本当のところは分かりません。よく見えないのです」

「政府は都合の悪いことは隠すもんな。見える化しなければ」

しかし、山本は悲しそうに首を横に振る。

「見える化しても見せ方の角度を変えれば国民は騙されます」

「なるほど。どうすればいいんだろ」

そのとき全国の新型コロナウイルス感染者数を示す日本模式図が表示される。東京都が1000人。大阪府が500人。愛知県が300人。北海道が200人……

「今日も東京がダントツの1位。大阪は半分か」

「ほら、すぐ騙されるでしょ」

「えー？ 1000と500。半分に間違いない」

「そうかしら。東京都の人口が1000万人で大阪府の人口が500万人なら人口1万人当たりでは、東京は1人。大阪も1人。同じだわ」

「あっそうか。だから大阪府知事は焦っているのか」

「そうかしら」

再びの「そうかしら」に田中が首を傾げる。

「PCRの検査を何人受けたかが発表されていないわ。たとえば東京ではこの日1万人が検査を受けました。大坂では2万人です。さて……」

「検査での陽性率は東京では10パーセント。大坂では2・5パーセント。そうすると、えーと東京と大坂の……何か何だか分からなくなった」

田中が山本ではなくて大家を見つめる。

「こう言う複雑な話には付き合わないことにしておる」

山本が大家をなだめる。

「まあそう言わずに付き合ってください。発表された数字に落とし穴があるの。まず各都道府県その日の感染者数というのは何時から何時までの二四時間なのかも不明です。日によっては二十時間の集計かも。余りにも多くなるとそうするかも知れません。少なければ三十時間分の感染者数を公表するかも知れません。いずれにしても速報値という言葉で逃げます。この地図上の数字は一体何を表すのでしょうか？」

「専門家は数字の意味をなぜ解説しないのか！」

田中は自分の分析能力が低いのを棚に上げて怒鳴る。

「ですから政府がいつも言ってるでしょ」

「？」

山本が首相になりきって言葉を並べる。

「専門家会議を開いて協議してしつかりとその意見を尊重して今後の方針を強い緊張感を持って各都道府県知事と情報を共有しながら綿密に連絡を取って今後のことに備えて関係省庁と協力して対処の方法を調整した上で国民にわかりやすい説明を心がけながら判断……」

田中が山本を遮る。

「国民はややこしく複雑な数字を求めない。そこを突いて政府は、そして自ら分析解説することを放棄したマスコミは、ただ日本地図に数字を書き込むだけなのか」

大家が弱々しくつぶやく。

「なるほど」

## 第十一章 サクラとニワトリ